

神津恭介事件簿

影なき女

「平和新書」は、あなたの図書館です。この本をお読みになつてのご意見、ご希望などをおよせください。現代の探求、頭脳のレクリエーション、新しい生き方の工夫……。『平和新書』はこうした本をあなたとともに発行してゆきたいと思つております。

「平和新書」編集部

『神津恭介事件簿・影なき女』 平和新書

昭和39年1月15日 発行 定価 270円

著者 高木彬光

発行者 兵頭武郎

印刷所 図書印刷株式会社

製本所 辰文社

発行所 アサヒ芸能出版株式会社

東京都港区芝新橋4の34 (TEL 581・6261)

乱丁・落丁はおとりかえします。

神津恭介
事件簿

影

なき

き

女

高

木

彬

光



平和新書

目次

影なき女×××5

幽霊の顔×××55

魔笛×××87

白雪姫×××115

目撃者×××183

カバ―装幀／滝瀬弘

影なき女

第一章 影を追いて

寒い夜だった。九時近くまで、この事務所の冷え冷えとした一室で、とぼしい火鉢の火をだきながら、仕事をつづけていた私は、寒さしのぎに、コーヒーでも飲んで来ようかと思って立ち上った。その時である。テーブルの上の電話の呼鈴が、静かな部屋の空気を破って鳴り響いた。

「もしもし、相良先生の事務所ですの
」
若い、甲高い女の声であった。

「先生はいらっしゃいますか？ いらっしゃったら、ちょっとお電話へ」

「先生はお出かけですが、間もなくお帰りになることと思います」

私の答は全然、事務的だったが、女の言葉は、恐しいまでに気狂いじみていた。

「そう、それじゃあ、先生がお帰りになったらお言伝して……人殺し、殺人事件なんですわ」
「人殺しですって」

私は愕然として問い返した。

「そうてすわ。ひ、と、ご、ろ、し、よ」

「誰がどこで殺されたんてす」

「ホッホッホ。まだ殺されたんじゃないやありませんわ。わたしがこれから殺しに行くのよ。森島信太郎という男をね」

「あなたは、いったい、誰なんてす」

「誰でもない。影のない女なのよ、ホッホッホ。分って。お忘れなく、お言伝願いますわね。その前に、ヘノポコ探偵さんに、御挨拶しておこうと思っただけ。では先生に、くれぐれもよろしくおっしゃってね。ホッホッホ」

悪鬼のような笑声が、受話器いっぱいに響きわたったと見るや、たちまち電話はプノリと切れた。私は背筋に、氷のようなつめたい悪感が走るのを感じながら、しばらくその場に立ちつくしていた。

私立探偵の事務所に、電話で殺人を予言する女！ 自ら影なき女と名のる妖婦！

これは狂女の仕業だろうか。だが、これがもし狂人の譫言でないとしたら、これこそ身の毛のよだつ極悪人の犯罪ではないか。

私は咄嗟に階段を駆けおりていた。そして彼の行きつけの二、三軒先の小料理屋にかけつけた。

相良竜夫は私の学校の先輩だった。中学時代から、剃刀のように鋭い性格で、その上、石のようにつめたい心を持っていた。人情などは、爪の垢ほども持ちあわせてはおらず、あらゆる機会を自分の利益に利用する以外、何も考えていなかった。大学を出てから、私立探偵を開業したが、人の裏面の生活を探ることには、恐ろしいばかりの才能を発揮して、味方にしても、敵にしても、これほど恐ろしい人間はなかった、といえよう。命からがら、シベリヤから復員して来た私を、こうして助手に使っているのも、就職難をいいことに、ほかでは考えられない安い俸給で、酷使できると、ちゃんと算盤をはじいての仕業なのだろう。

巴屋というのれんのかかった料理屋の戸口をガラリと開けると、彼は小肥りの顔を真赤な色に染めて、しきりに酒杯を上げていた。

「日下部君、困るじゃないか。事務所を空にしてこんな所へ来ちゃ、どこから電話がかかって来るか知れんのにさ」

「先生、その電話で、こうして来たのです。実はこういうわけなんです」

口早に、私の報告する言葉を聞いて、彼は愕然としたらしかった。

「森島信太郎って、いったっけね」

「そうです。先生は御存じですか」

「いや、個人的には知らないよ。だが、有名な事業家だ。いや、事業家というより悪徳高利貸、随分恨みを買っている男だぜ。僕の友人の浜田主計という男が、そいつの秘書をしている。こいつも、主人に劣らずいやな野郎だが、一応友達甲斐に、電話をかけて忠告してやるか」

彼はフラフラした足どりで、立上った。彼が友人を悪くいうのは、今に始ったことではないが、私は、その時、何だかいやな気持がしたのだった。

事務所へ帰って、彼はしきりに、電話器のダイヤルを廻していた。ところが何度廻しても、相手はどうしても出ないのだった。

彼の顔には、何かしら焦慮の色が争えなかった。

「日下部君、故障らしいね。僕は何だか胸さわぎがして来た。まだ九時きっかりだから、ちょっと行って様子を見て来ようじゃないか」

性格的には、反撥するものを感じていたが、事件の匂いをかぎ分ける彼の勘と才能には、私もさすがに敬意を感じていた。ことに私も、あの電話の相手の女には少からぬ恐しさと不安を感じていたのだから。

事務所を出て五分、虎の門の交叉点の附近で、私たちは流しのタクシーを拾った。

「中目黒の駅のそばまでやってくれたまえ。七百円だって？　いくらでもかまわないよ」
それきり深くクッションに身を沈めて、彼は一言も口を開こうとしなかった。

月はなかったが、つめたい星が、天上に無気味なまでに冴えた光を放っていた。初冬の夜の、きびしい寒さとまじわりあって、ジーンと骨身に迫って来る未知のものに対するはてしのない恐怖が、私の心をたとえようもなく冷たくした。

三十分近くも走りつづけたころだろうか。彼は突然身を乗り出して、前方の闇の中を見つめ出した。

「運転手さん、それ、そっちだ。その角を、左に曲って三丁ほど行ったら、また右へ折れてくれないか。それ、そこだ。ストップ」

自動車は、一軒の上品な邸宅の前に停った。それほど豪邸というわけではないが、和洋折衷の二階建、周囲に高いコンクリート塀をめぐらしていた。大きな芭蕉のバサバサした葉が、冬の木枯に、身をふるわせて、そよいていた。

門柱のベルを、私が押そうとした時である。潜りの小さな戸を開けて、三十二、三の青年が飛び出して来た。綺麗に櫛けずった髪は乱れ、目は血走り、顔色は死人のように蒼ざめていた。

「浜田君、浜田君じゃないか」

この青年は、その時はじめて、私たちに気がついたような様子であった。

「相良さん、どうしてここへ」

「ちよっと君に、用事があったってやって来たんだが、そんなにあわててどこへ行くんだ」

「あなたは女を見ませんでしたか」

「女って　　とんな女」

「黒いオーバーを着た、色の白い恐しい女です。たしかに、ここからいま出て行った……こうしてはいられません」

「その女が、森島さんを殺したのかね」

「あなたは……あなたは、どうしてそれを」

彼は二、三步よろめいて、幽霊を見るように私たちの顔を見つめた。

ないほどの、恐しい瞬間だった。

あの電話は、決して狂人の譫言ではなかった。ただの悪戯ではなかった。悪意と自信に満ち満ちた、犯人の恐るべき挑戦に外ならなかった。

「僕たちは、その女から殺人の警告を、電話で受け、こうしてやって来たんだよ」

彼の顔には、その刹那、何ともたえようのない恐怖と動揺があらわれたか、

「相良さん、そのお話はあとでしましょう。とりあえずあの女を追いかけて　警察にも知らせなければ　この自動車をお借りします」

「そうしたまえ。てはまた後で　」

自動車を見送っている相良竜夫の目は、獲物を見つめる蛇のように物すごい光を放った。

「日下部君、これは唯事じゃあないぜ。行って見よう。犯罪捜査は、先手を打つのが、何よりの勝。とりあえず現場拝見と出かけようじゃないか」

玄関の戸は大きく口を開いていた。明るい電燈の光を浴びて、家人が右往左往している。

「御免下さい。御免下さい」

渋い和服の三十近くの美しい女がはっとしたようにふりかえった。

「どなたでいらっしゃいますか。いま、とりこみの最中なので　」

「それだからこそ上ったのです。私は浜田君の友人で、こういう者ですが……」

彼の名刺を見て、その女は、のけぞらんばかりに驚いた。

「私立探偵の　相良竜夫さん！」

「そうです。お話しはいま外で、浜田君からうかがいました。とりあえず、現場を拝見させて下さい。何かのお役には立てましようから」

その気魄に気押されて、女は私たちを上へ通した。

「わたくし、森島の家内で、世津子と申します。ふしぎな雲をつかむような事件で動転しておりますが、どうぞこちらへ」

女の後について、廊下をしばらく歩いて行くと、庭の中へ、離れのように突き出した洋館の一棟に入った。

一方は庭、一方には三つの部屋が続いていた。突きあたりは、庭への出口になっているようだが、鍵がかかっていた。

中央の部屋の、褐色に塗られたマホガニーの扉を開いて、女は大きくすすり上げた。

「この部屋なんてす。これが主人：　こうして殺されてしまったんです！」

厚い絨毯を敷いた床の上には、三十四、五の長身の男の死体が横たわっていた。高利貸などという職業にはよくありがちの、無情な冷酷さを感じさせる、肉の落ちた、頬骨の高く突き出た顔であった。浅黒い顔色からは、もう全く生きた血の気が引いて、唇の端の痙攣に歪んだあとも、大島の着物の袖からつき出して、虚空をつかんでいる両手にも、明らかに神経性の毒による、冷酷な殺人を直感させた。

「死後、三十分とはたっていないません。明らかに毒殺……ですね。ですが奥さん。まだ時間は十時

前というのに、どうして犯人をむぎむぎ逃がしてしまったんです」

「でも、あの女は、どこからも逃げたんじゃありません。この部屋から、煙のように姿を消してしまっただけです」

「どうして　それはどうしてですか」

「この部屋の中をよく御覧下さい。この部屋は、全然何にも手をつけなくて、そのままにしてあります。ところがあの通り、室は中から鍵がかかっています。隣の部屋には、二人も人がいましたし、廊下から庭へ出る出口には、わたくしが、たしかに錠をおろしました。母屋の方へ帰って来れば、わたししか女中が、気つかないはずはありません。第一、お玄関には、靴かそのままおいてあります。玄関も裏口も、ちゃんと戸じまりしてました。それではどこへ逃げたのてしよう」

たしかに、部屋のフランス窓には錠がおろされ、その外側には重い鉄の錠戸が嚴重に閉じられていた。内側から掛金がおろされていて、その反対側には大きな暖炉、ガスの焰かやわらかに燃えていた。その上に、五十号ぐらいの大きさの油絵、殺された主人の肖像か、口もとに皮肉な笑いを浮かべながら、自分の物いわぬ死体を見下しているほかには、何の調度もない部屋だった。

テーブルの上には、飲みさしのコーヒー茶碗が二つ、そのほかに、灰皿と、黒ビロードの葉書の大きさぐらいのケースが、のっているだけであった。

「なるほどね。それでその女がやって来たのは何時ごろでした」

「九時ちょっと過ぎでした。お玄関て呼鈴の音がしましたので、出て見ますと、あの女が外に立

っていました。黒いオーバー、黒い帽子にネットがついて、着ていた衣裳は上から下まで黒ずくめてした。御主人にお目にかかりたいといいますので、お名前を、とたずねましたが、そのわたした名刺は、どうした事か、ただの白紙——表にも、裏にも、何の名前も印刷してなかったのです—

わたしはびっくりしてしまいました。ところが相手は、いいんです、それでいいんです、お分りになりますからといって聞きません。

わたくしは、仕方なく、この部屋にいた主人にそれを取りつぎました。主人はビクリと、眉をひそめました。

——よかろう。会って見よう。

といって、この部屋へ通すように、命じました。案内してから、わたくしは、この廊下の突きあたりの錠がはずれているのに気がついたので、それをかけ直し、お台所へかえって、コーヒ—を作り、それを持って、この部屋へ入りました。

ところがその時、帽子をぬいていましたが、女はこの暖炉の前に立っていて、壁の肖像を見つめていたので、顔は全然見えなかつたんです。それから、母屋の部屋に帰って、針仕事をしている中に、浜田さんがバタバタとかけて来て、人殺しだ、旦那さんが殺されたといったんです。

何が何だか分らずに、かけつけて来ると、この有様　　主人が死んで、女はどこにもいなくなつたんです—

夫人は、その生々しい思い出を、途切れ途切れに物語りながら、濃艶な切長の大きな眼から、

「それは何とも、御愁傷さまでした。とすると、御主人の生きておられる姿を見たのは奥さんが最後ですか」

「いいえ、わたくしではありません。ここにいらっしやる久原さんなんですの」

いつの間に入って来たのか、四十二三の実直そうな中肉中背の男が、私たちの後に立っていたのだった。死骸よりも青いくらいに顔色を失って、両手の長い指先が、神経質にガタガタと震えていた。

「あなたはこの家の方ですか」

「いいえ、いいえ、違います。私は銀座の宝石商、香月堂の久原諒一と申す者ですが、実は三百万円のダイヤの首飾りを、ここへ持って上ったわけなんです。ところが森島さんは、非常にはつきりしてしまいました。

——おれはブローカーだぜ。こんなダイヤを買ったところで、何も女房や、妾に飾らしたいわけじゃない。右の物を左に動かして、儲けりゃそれでいいんだ。いま、おれのところには、ダイヤを買いたいというお客がある。君のところへ世話することは簡単だが、それじゃ、手数料しかとれない。こんなものは、どうせ、値があつて、ないようなもんだから、いくらで売るのも、おれの腕一つ。ちよつと品物を貸してくれないか。いや、手から離せとはいわないよ。自分で持つて来て、ただ値段の相談をする時だけ、隣の部屋で、待っていてくれないか。

と、こうおっしゃるんです。ほかの方なら、もちろんお断りするんですが、森島さんには手前

どもは、大分無理な金融も、お願いしている始末なので、ついお断りも出来ず、品物を持って上りました。

この隣の部屋で、お待ちしておりますと、ベルが鳴って、浜田さんが入って行きましたが、すぐに出て来て、

——それじゃあ、ダイヤを持って行ってくれたまえ。森島さんの部下のような顔をしていくれよ。

とおっしゃいましたから、うなずきまして、隣の部屋からこの部屋へ入りました。

たしかに黒いオーバーを着た女の人が壁の絵を見つめて立っていました。

ケースの蓋を開いて、ダイヤを見せると、森島さんはうなずいて、

——それじゃあ、隣の部屋で、待っていてくれたまえ。

といわれましたので、女かこちらを振りむきもしませんし、顔を見られたくないようなわけがあるのかと思って、そのままひき下りました。それでも、実は心配なので、隣の部屋の廊下へ出る扉は開け放しにして、誰か通ったら、気がつくようにしておきました。ところか、二十分ほどしても、何事ありません。心配になって、扉をノックしましたが、何の答えもなく、ただドタリと、人の倒れるような音と、ひくい呻き声が聞えました。

いても立っても、おられなくなったので、ノックをひいて見ましたが、こちら側から掛金が落ちていて、開きはしないんです。

浜田さんと、二人で廊下へ飛び出して、この部屋の廊下の扉を押して見ましたが、これも開か